
虚神カリュドゥス

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚神カリユドウス

【Nコード】

N2925M

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

シカディアンたる建物のカルト組織「カリヒア」には謎の神秘性が含まれていた。青谷がたどり着く真実とカリヒアのたくらみとは・・・やがて現れるこの世の終わりへのカウントダウン！

上

「ねえ、ぜったい良いからシカディアンにいこうよ。」

と、友達に誘われたのは四月十二日の事である。その頃の私はあまり忙しくなかったので気軽にシカディアンを何かも深く考えず、何かのパーティーだと思って「うん」と答えた。

シカディアンはカリヒアという組織の本部として使われている建物の名前である。ビルに囲まれたこの建物の、入り口の自動ドアの上に「シカディアン」と太いゴシック体で書かれた看板がかかっていた。その入り口を抜けるとロビーがある。ロビーは床と壁もこげ茶色だ。入り口から左側に階段、右側に受付があった。階段はなぜか立ち入り禁止の札があり、受付には奇妙な絵が飾られていた。それは顔だった。蒼白な肌、一つ目、頬まで裂けた牙の並んだ口。これは何だろうか。

受付に「ここ、初めてなんです」とか言いながら私は名簿に自分の名前「青谷 永^{ひさし}」と書いた。

受付の向こうに「集^{つど}いの部屋」という部屋に通じるドアがあったので中に入ると、円形に並べられた椅子に三十人もの人々が座って、わさわさと雑談していた。ふと、部屋の隅で人々を傍観している一人の女性を発見した。係員かなと思ったが、表情がやや暗く、そうには思えなかった。

「ちょっと、新人さんかい？ここに座んなよ」

と椅子に座っているある男が私に呼びかけた。私は彼に従い座って、質問した。

「あの・・・ちょっと気になったんで・・・隅っこで見つめている女性って、何者ですか・・・？」

「ああ、あれは瑠（だ）（る）——田竜子（じゅうこ）という名前の人で、もともとは我らの仲間だったんだ。だがある日我らの輪から離れて、以来、あのままさ。原因は分からない。我らから離れるつもりなら、なぜあそこにいるのかも分からない。とりあえずアヌタ様は彼女を無視している。」

「アヌタ様？」

奇妙な名前だ。

「この会長、阿（ぬ）（あ）——奴多（とし）（た）——利光（みつ）の事だよ。偉大なる我々の指導者だ。あ、来たぞ。」

「集いの部屋」に、その阿奴多が来たので静かになった。大通りに近い建物なのに車などの周りの騒音が聞こえなかった。

阿奴多は白いスーツ姿で超然とした顔つきと雰囲気をしていた。彼はゆっくり話し始めた。

「皆さん、今晚は。来てくれてありがとう。まず、始めの一言・・・と言いたいところだが、今日は新たな人が我々の仲間に加わった。

青谷永さんだ。」

阿奴多は私を指し、皆が祝福の拍手をした。私はとりあえず一礼した。

「さて、早速キリーヒムをしよう。まず、皆さん、隣の人と手を繋いで。」

そして皆が手を繋いだ。これから何をするか私は戸惑った。

「そう、そう。そして、目を閉じて瞑想し、カリユドウス言葉をセプレツタムを通じて感じましょう！」

「あのう・・・」

分からない事だらけだったので私は手を挙げて大きめの声で質問した。

「さっきキリーヒムとか、カリユドウスとか、セプレツタムとか言っていたんですが、それってどういう意味ですか？」

「おっと、失礼、では説明します。カリユドウスはこの世界を司るつかやう神の名前です。ロビーの受付にその御顔が描かれた絵があります。

さてカリユドウスは太古の昔にその姿を現していたのですが、人達達の調和が乱れ、仲が分裂したので姿を隠してしまったのです。しかし、我らの神は今が人類の大変革期と考え、素敵な石を私に授け、私達に語りかけてくださったのです。この石こそセプレツタムです。

「

そう言つて阿奴多は乳白色の石を取り出して見せた。

「セプレツタムから語りかけるメッセージは複雑ですが、大きな特徴の一つ。それは背後に合唱のような音が聞こえるのです。それがキリーヒムでございます。では、始めましょう。皆さん目を閉じて、耳を澄まして。キリーヒムを聴くのです。この部屋は、周りの音が聞こえないように設計されていますから静かに聴けますよ。では始め！」

最初目を閉じたときには当然ながら真っ暗であつた。だが何か光景が浮かび上がり、最初それは緑、青とぼんやりしていたが、突然はつきりした。草原に青空。皆が円に並び、中央に阿奴多がいた。皆が喜びの表情で阿奴多を見ていた。阿奴多の顔が徐々に崩れ、肌は蒼白になり、目は一つ、口は頬まで裂け牙が並んだ。それはロビーで見たカリユドウスの顔であつた。もはや思考する必要も無い、永久的な至上の歓喜と、幸福の光に包まれ、私自身も光を発し、何もかも、喜び以外の現実には捨て去られた。いつのまにか背後に合唱のような音、キリーヒムが聞こえた。それは聞こえると同時に私の口

からも発せられていた。

R
e

「はい、止め！」

風景が弾けた。最初ここはどこかと思ったが、すぐにここはシカディアンディアンの「集いの部屋」であることを思い出した。咽喉の感じから実際に歌つたらしい。現実に取り戻され、虚脱感がした。もう一度あの世界に生きたいと思った。「キリーヒム」の最中にいつのまにか二時間がたっていた。

集いが終わるとき、瑠田は静かに帰って行くのを見た。私も家に帰った。

家での体験を思い出してみたが、素晴らしい体験と感じていたのに、その記憶は言語化できず、曖昧になっていった。もう一度シカディアンディアンに行きたくなった。

シカディアンディアンに通い始めて二日目にもやはり瑠田がいた。彼女はいつも通り傍観していた。

集会の始めに阿奴多アヌタが来て言った。

「我々の仲間でない、すなわち外の者達である、すなわちノデイスは我々カリヒアを中傷します。頭がおかしい、怪しい、危険だ、など等。それらは皆無知から出たたわ言です。人間は知らないものに無責任な批判をするものです。しかし、かの日が訪れれば、我らは一つになり、無知なノデイスに我々カリヒアの偉大さが分かり、我らの神力リウドウスリウドウスに付き従っていくでしょう。そして我々の勝利です。希望を持ちましょう。では『聞き』の時間です・・・」

二日目の夜も記憶が曖昧で再びあのもどかしい気分が押し寄せた。もう一度あの世界に生きたいと思った。現実なんかどうでもよくない。

そして三日目、四日目とシカディアンに通いつめていた。そのうち部屋は汚れて、ある日自分の状態を振り返ってこれはおかしいんじゃないかと思い始めた。考えてみれば彼らカリヒアのやっている事は何も意味の無い事だ。実際にカリユドウスは何だか分からないし、謎が多く、悩みの種となった。

そして、ある日集いの帰りに瑠田に相談する事にした。彼女も同じ悩みを抱えてカリヒアから離れているのかもしれないと思ったからだ。

「瑠田、竜子さん……ですか？」

「そうだけど。」

「ちよつと相談したいことがあつて……」

「そうだん？」

「あの……カリヒアって、何なのか分からないんです……何と
言うかアレは……」

「胡散臭い？」

「そうです。ですから他の人ではなくあなたに相談したいのですが・
……」

「あれの正体知りたい？」

突然の問いに驚いたが。私がやはりと思い「はいっ」と答えた。

「そうか・・・確かにあれは明らかにインチキな集団なんだけど、何と言えぱいいのかな・・・青谷くん・・・だよ。忍び込む勇氣ある？」

「まあ、多分」

「夜になれば二階に阿奴多が、三階にあれの秘密が眠っている。私が話すより実際に見たほうがいいと思う。とにかく、あれはインチキであることはたしか。どうインチキか確信を持ちたければ夜、やるんだよ。彼に気付かれないように注意して。」

そして私はその翌日の夜、決行した。入り口の「シカディアン」という特太のゴシック体の看板が暗闇で脅迫的にも見えた。

二階は阿奴多の部屋であつた。彼はベッドに寝ていた。部屋が非常に汚れていた。

三階は物置であつた。複数のダンボール箱に本や紙が入っていた。そのうち一つに「巨神カリユドウス」という題のノートが詰まっているのを発見した。題名の下には「相田 小見郎」と書かれていた。それらを一瞥するだけでカリヒアが何かが分かった。あれは少年相田の作り出した物語の世界で、阿奴多に改名して実現させようとしているだけなのだ。もしかしたら「阿奴多」の名もあの「巨神」に載っているのかもしれないが、とりあえず他を探してみた。

阿奴多には妻がいたらしい。というのも妻の写真があつたからだ。全く見かけないが、いつからいなくなったのだろう。どこか印象的な笑顔をしていた。

「セプレツタムについて 相田小見郎」という文章を発見した。何だろうと概略を見ると以下のように書かれていた・・・。

「人間には微弱ながらテレパシーを持つ。場の空気を読む、気の合う人が分かる、などはこれが関係している。もし同じ思いの者が同じ場にいると、互いのテレパシーの波動が共鳴し、共感し、その思

いが一層強くなる。これが大勢になれば、俗に集団心理と呼ばれる現象が起き、これによりもともと共感していない者も共感させたりする。また、多くの造形芸術に見られるように、思いを形に、つまり実現化すれば共感是非常に強まる。

これらに注目し、さまざまな試行錯誤を行い、私はセプレツタムを作り出した、これは外殻はF1物質とF2物質と言うテレパシーを感知して発信する2種類の物質で、中身はテレパシー波を受け実際に形作る、いわば媒体の役目をするS物質で出来ている。

まず何らかの思いを外殻のF1物質が受け、それをS物質に伝える。そしてS物質が風景を形作り、その強力化した内容をF2物質が発信する。そして他の人にその強力なテレパシーを送る。こうして自分の思いを自分自身で共感するだけでなく、相手を共感させることもできる。」

あまりにも信じ難い内容であつたが納得できた。シカディアンで得た不自然な感動は、やはり「素敵な白い石」によつて共感させられた物だつたのだ。あれさえあれば並なカルトでも政治家でも信奉者が簡単に増やせるに違いない。この機械で現実から逃げる事ができる。

その文章の下に「十月十三日　〇〇広場にて実行。我らは一つになり、ノデイスはそれに屈服するであろう」という紙を発見した。はたして何を行うのか。私はなんだか不気味な予感がした。

とにかくカリヒアの集いに何か良くない陰謀らしきものを感じた私は、次の日からカリヒア達を説得しようとしたが、不可能であつた。阿奴多の巧みな洗脳のおかげか、「そんな事言つて、いずれあなたにも分かりますよ。」としか言われなかつたし、下手に阿奴多の正体をばらしたら彼の耳に入る危険もあつたからだ。

結局は瑠田みたいになつて相談されるのを待つしかなかった。カリ

ヒア、カリユドウス、阿奴多利光に対し本人が疑問を持たない限り説得は不可能な気がしたからだ。

R
e

「はい、止め！皆さん、いよいよ明日が本番です。かの日が訪れるのも明日です。その日は我々にとって勝利の日となるでしょう。ノデイスらを屈服させ、我々に従わせるのです。我らは一つ！」

「我らは一つ！」

阿奴多言葉に応じてカリヒア達が叫び、最後のカリヒアの集いが終わった。私と瑠田は顔を見合わせ、頷いた。

いよいよ明日、何かが起こる。

下

「今！我々は！人類の大変革期にあるのでございます！」

と阿奴多利光あぬたとしみつが駅前あぬたとしみつの広場で叫んだのは十月十三日の事である。彼は壇の上に立ってセプレツタムを天上に掲げ周りにカリヒア達が喜びの表情で彼を見ている。彼の話はシカディアンで散々聞かされた言葉ばかりである。「我々の勝利」「我らは一つ」「無知なあなた方ノデイス」傍らで聞いていた何人かは侮辱と受け取って「黙れ！ひっこめ！」と彼を罵っていた。そういった様子を私と瑠田竜子るだりゅうこはやや遠くから傍観していた。この先何が起こるかは未知数であった。

R
e

そのうち彼らはキリーヒムを歌い始めた。私はそれを聞きながらこれまでの数々の出来事を回想した。カリヒアの集い、疑念、セプレツタム、「巨神カリユドウス」、相田小見郎、共感、虚像、世界統治、「我らは一つ」、そして今、何かが起ころうとしている。歌だけで終わるはずが無い。なにかとてつもない出来事が。それは善か悪か。歓迎するべきか忌むべきか。白い影が囁いた。

（善か悪かなんか、判断する必要ないのだよ。人は判断という過ちを犯すものだ。判断する事で決め付け、裁き、心が捻じ曲がる。）いや、判断しなかったら・・・これまでの科学、歴史、法律、道徳は何なのだ。それは人間の決めつけから出た虚像に過ぎないのか。（そうだ。現実には判断が生み出した偽者。そして今、まさに、人間

の嘘である現実が崩れようとしている。歴史的瞬間に一緒に加わるのではないか。）

黙れ。

（意味なんていらぬ。何事も意味を求めるのが人間ノデイスの悪癖）

黙れ、何様だ。

（我らは一つ我らは一つ我らは一つ……）
黙ってくれ！

（ R e

）

瑠田に小突かれ、私は正気に戻った。「ねえ、見て」と瑠田は歌う阿奴多達を指差していた。

見ると、ほんの三十人だったはずの歌の群れがいつのまにか五十人ほどに増えていた。傍らの見物人達から次々と共感させられ、歌いながらゆっくりと歩いて歌の群れに加わっていったのだ。私は彼らを戦慄の思いで眺めていた。

五十、七十、そして群れが百人に達したとき異変が発生した。阿奴多の頭上に掲げていたセプレツタムが燃えたマグネシウムのように発光してどろどろと溶け、阿奴多の顔面に直撃していくつか地面に飛び散ったのだ。極度の共感、シンパシーに耐え切れずに外殻のF物質が崩壊したのだ。

恐ろしい事に中身のS物質の多くは阿奴多の身体と接触し融合していた。阿奴多の顔面が変化しだした。肌は蒼白に、両目が眉間のほうに集まって一つに結合し、鼻は消失、口は頬まで裂け、並んだ歯は凶暴なまでに尖った。それはカリウドウスの顔であった。阿奴多は、S物質と融合した自分自身の身体で、その願いを具現化させたのだ。阿奴多はカリウドウスになった。

「ああ、阿奴多さま、いやカリユドウスさま」「そのときが来たのですね」「ああ」と周りのカリヒア達のカリユドウスの身体に接触した。その瞬間、彼らの身体は白くそまり、カリユドウスの身体の一部になった。そのように次々と人が融合され、最終的に百人もの身体を吸い取ったカリユドウスはぐにやぐにやと150mもの巨人へと形作られながら、ビルの上まで浮かび上がった。

Re

天上でカリユドウスはその細く巨大な両腕を左右に広げ、体を仰向けに、顔は前に向きながらゆっくりと飛んだ。巨体が太陽を覆ったので後光が差し、持続的に鳴り響くキリーヒムが奇妙な静寂さと畏怖のようなものをもたらした。周りの空やビルは背景に見え、カリユドウスだけがはっきりと現されていた。

ヒュウウウウウ、ズガガン。カリユドウスの右胸にミサイルが激突し、爆発した。それをきっかけに、いつのまにか来た軍隊が総攻撃を開始した。先ほどのミサイル、機関銃、戦車砲などが大量に無計画と思えるほどカリユドウスの方に発射された。だが、カリユドウスの目が突如閃光を放ったかと思うと、次の瞬間、とてつもない大爆発が聞こえ、軍の銃声がピタリと止んだ。

それをきっかけに傍観していた人々が圧倒され、口々に「我らはひとつ!」といいながら宙に浮かんだ。信じられない事に浮かんだのだ。そして彼らはカリユドウスの方に向かっていった。白い影が再び囁いた。

（そつだ。皆が“一つ”に向かっている。抵抗など無駄だと気づい

たからだ。しかし、もう少し前に気付くべきだが）
黙ってくれ。

（なぜに青谷君、君はあれを拒絶するのかな？）

私は気をそらすため、突然何故か前に歩き出した瑠田を見ていた。
彼女は阿奴多のいた壇の傍で立ち止まり、何故か両手で地面をタッチした。

（そんな奴なんかどうでもいいだろう。青谷君、どうしてあれを拒絶するのかな？君は只の人間に過ぎないのに。）

瑠田は立ち上がり、そのまま止まった。

（君が人間だからと言って、凄い事は何も無い。だがあつちでは君と同じ特別でない人間達が己の醜いエゴを捨て、真に神聖たるものを支え続けている。それは偉大なる行為で、彼らは賞賛に値する。それに比べ、君の抵抗は絶大な心理から逃げてひたすら自己満足に浸っているだけだ。）

そうなのか。結局カリウドウスを虚構に決め込んだのは私自身の考えや現実が偽者だったからなのか。

いいや違う違う、あのカリウドウスこそ、阿奴多、いや相田小見郎の自己満足ではないか。

（何を言う。阿奴多の行為が自己満足なんて大きな間違いだ。なぜなら、現にカリウドウスは存在するではないか。）

そうだ、そうなのだ。何が正しい。どうすればいい。

R
e

混乱した私に、キリーヒムは癒しの音楽のように胸に染み渡った。
その時私は納得した。そうだ。これが解決だったのだ。我らは一つだ。これこそが自然の行く道なのだ。

（さあおいで）

はい、今行きます。全ては一つのカリユドウスさま。

地面から足が離れた、周りのビルや空は認識できず、カリユドウスの存在しか見えなくなった。分からなくなった。分かる必要も無い。現実を捨て去るのだ。凶暴にしか見えなかったカリユドウスの顔も今では非常に厳肅かつ優しく見えた。よんでいる、かれのもとにここ、あたらしいせかいにいくのだ・・・

どず、いた、なんだ、むねにしょうげきが。きがついたらいつのまにかどこかしらないところにあしをつけていた。どうしたのだろう、めのまえにひとがいる。ここわあたらしいせかいかな？

「ここは、どこ？」

「ここはびるのうえよ。」

「びる？びるってなあに？」

「びるがわからないの？おもいだして。あおたにくん。」

「あおたにくん？そこに『あおたにくん』くんがいるの？」

「ああ、もう、すっかりげんじつをわすれているのね。しかたないね。」

バアアアアアアン

突然電撃のような衝撃が走り、私は驚いて辺りを見回すと、自分がビルの真上にいるのに気付いた。やや遠くにカリユドウスの横姿が見える。瑠田が突然目の前に現れて、私は吃驚した。

「わ！瑠田さん！」

「・・・やっと正気に戻ったのね。」

そうだ。私は今まで謎の白い影の説得で共感させられたのだ。しかし・・・

「どうしてここにいらっしゃる。」

「あなたがここまで飛んできたからよ。」

瑠田が言う。私は嘘だと思った。共感させられた人は真っ直ぐにカリユドウスの方に向かうはずだ。ここにカリユドウスがいないのはおかしい。私は瑠田を疑わしいという目つきでじつと見ると、瑠田は「バレたか。」と私の知る限り始めて微笑んで話した。

「あのカリユドウスは何か分かる？ あれはね、思いを実現化するS物質が、阿奴多の願いと人体とを融合してできた代物なの。他の人が阿奴多と融合しているのは共感があるから。そもそも阿奴多は共感を第一に求めているのよ。皆、僕を見てください、僕を認めてくれ、僕と同情してくれ、多くの人がその為に身を犠牲にしているのね。そしてカリユドウスは想像力が形に表れた強大な力。何者にも抵抗できない。」

瑠田の言葉は、白い影の言葉の嘘を暴くものであった。だが、よく考えると先ほどの質問に答えていない。

「でもどうして、僕はここにいるの？」

「分からない？ 私は阿奴多と同じ。軍隊が滅んだ後に、阿奴多のいた壇の上でセプレツタムに接触したのよ。」

「え？ あ、それじゃあ・・・」

そうだ。白い影がささやく時、彼女は奇妙な行動をしていた。あれはそういう意味だったのか。そして瑠田は次に恐ろしい話をした。

「カリユドウスを滅ぼす事はできない。奴の体は心から来ている。奴を滅ぼすにはほつとくしかない。共感させるべき全人類がいなくなったとき、つまり皆と不自然な合体をするための共感の目的が失ったとき、カリユドウスは自分自身が崩壊する。」

それは世界滅亡を意味した。次に彼女は更に絶望的な事を言った。

「だから、青谷君、あなたもカリユドウスに向かわないといけないわ。」

「そんな・・・じゃあ、どうして僕を助けたんだ。」

「約束するためよ。青谷君。いつか迎えに来るからね。」

そう、微笑んで瑠田が話したとき、足が地面から離れるのを感じた。私は空中でもがいたがムダだった。私は瑠田を見たが彼女は微笑んでいるだけであつた。その彼女も背景のビルもろとも向こうに離れて行った。私は心の中で瑠田とこの世に別れを告げた。私は覚悟した。行こう。カリドウスの元へ。私はカリユドウスと接触した。

R
e

世界が開けた。

それはカリヒアの集いで見た光景と全く一緒だった。

草原に青空。皆が円に並び、中央にカリユドウスの顔をした阿奴多、ただ一つ違う点は人数が異常に多い。中央の阿奴多がゴマ粒にしか見えない。皆が一斉に物凄い音量でキリーヒムを歌っていたので、私も歌い始めた。もはや思考する必要も無い、永久的な至上の歓喜と、幸福の光に包まれ、私自身も光を発し、何もかも、喜び以外の現実には捨て去られた。だが忘れない。「迎えに来るからね」待てます。いつまでも。

「我らは一つ！」

「我らは一つ！」

「我らは一つ！」

「
我らは一つ！」

「
我らは一つ！」

「
我らは一つ！」

「我らは一つ！」

ずん。突然の重い衝撃。キリーヒムは徐々に消失し、阿奴多が蹲った。どうしたのかと皆が見ると阿奴多は顔を上げて突如黒々と溶け出した。それに共感され、阿奴多の周りの人も溶け出した。それにも共感され、次々と人々がドミノ倒しのごとく黒く溶け始めた。早く。溶ける様はまるで落とした泥のようであった。早くしないと。すでに並んで十人向こうに溶けているのが見えた。早くしないと私も。五人向こうで人が黒く溶けた。早くしないと私も溶ける。四人向こう、三人向こう、二人、そして目の前の人溶け始めた。早く！

突然手が現れて片手が掴まれたかと思うと、私はすさまじい速さでカリユドウスから離れて体が持ち上がった。瑠田竜子が私の手を掴んでいた。

「迎えに来たよ。」

そして突然手を離れた。私はあわてた。

「うわわわわ、落ちる！」

「大丈夫、落ちないよ。」

本当であった。空中なのに足が着いていた。

「青谷君、あなたもカリユドウスに触れて、私と同じになったのよ。」

今、この世界には私とあなたしかいない。少なくとも地球上ではね。

「
瑠田がそう言つて、三度目の微笑をした。それは何かを思い出させ
たが、はつきりしない。」

私達二人は地球を見下ろした。全人類を吸収して地球を覆うほどの
大きさになったカリユドウスはこちらを見上げて滅んでいた。悲痛
の目で「キアアア」と激しく絶叫し、身体の端からぐずぐずと黒
ずんで崩れていくのが見えた。やがて唯一の特徴であつた顔も「虚
無」に蝕まれ、下あごが消失して叫びが止み、巨大な一つ目だけが
残った。その一つ目も黒く充血してやがて破裂した。その腐った身
体で青い地球は黒々と染まった。

カリユドウスは死んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2925m/>

虚神カリュドゥス

2010年10月14日14時18分発行